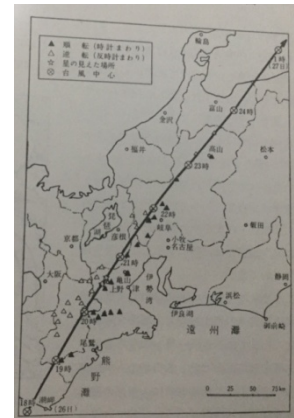


伊勢湾台風の暴風

台風は非常に強い勢力を保ったまま9月4日昼、徳島県南部に上陸し、淡路島から神戸付近に再び上陸した。急激に風雨が強まっている。大阪湾の高潮も心配だ。どうも落ち着かない。ふと1959年9月26日の伊勢湾台風を思い起こす。

書棚から『伊勢湾台風災害誌』（名古屋市、1961年3月）を取り出した。引越の際にも大切に取っておいた。これは名古屋市立大滝子キャンパス前の古本屋さんで手に入れた。3500円と手書きしてある。いまは住宅になってしまったが、この旧制八高の雰囲気が漂う古本屋さんによく通った。最近の学生さんは、あまり利用してくれないと嘆いていた。『伊勢湾台風災害誌』から。

1961年9月21日マリアナの東にあった弱い熱帯性低気圧は急速に発達して、22日9時には台風15号となった。台風は発達を続け北東に進み、26日18時過ぎに潮岬の西およそ15kmのところに中心が上陸した。台風はその後、19時は奈良・和歌山の県境に、20時には奈良県中部、21時には鈴鹿峠付近を通り、22時には揖斐川上流に達した。最大風速（10分間平均）は名古屋で22時に南南東37mを観測した。台風が通過する前2～3時間は、時間雨量40～70mmの激しい雨が各所で降り、各河川は急に水かさを増し、これと高潮により河口付近ではいたるところ堤防は決壊し、大災害を起こすにいたった。



伊勢湾台風は超大型の台風として、東海地方の西部を通ったため、東海地方一帯に暴風雨をもたらしたが、とくに伊勢湾周辺の風は激烈をきわめた。これは、台風進路の左側では台風への吹き込みの風と台風を流す風とが相殺して風速が弱くなるのに反して、右側ではこれらが相加わって強い風を生ずる現象による。

当時、名古屋市千種区千種本町(国鉄千種駅に近い飯田街道沿い)の鉄道官舎に住んでいた。伊勢湾台風による高潮などの水の被害はなかったが、今でも忘れられないのが、暴風の恐怖である。暴風の経過と恐怖の時間を振り返ってみよう。あの日には土曜日。昼過ぎに千種小学校を下校したが、すでに風が強かった。台風が近づくので、早めに夕飯を食べた。その頃には、ガラスがしなる音などして怖くなってきた。

鉄道官舎は木造2階建ての細長い長屋。自宅は南東向きに位置した2階かど。強烈な風が雨戸や窓に吹き付ける。今とは違って、雨戸や窓はアルミサッシではなくて木製の板を打ち付けるが、それが風でしなる。窓が破れると、天井や屋根が飛ばされるので、母と兄と私で数時間にわたり必死で板を押さえていた。近所の人も手伝いに来てくれたが、あのと時の恐怖と時間の長さは、今もはっきり覚えている。父は「ある事情」で、翌朝まで帰宅できず、家族から非難を浴びた。

(2018年9月5日)